

生命は「DNAの試行錯誤の途中経過」

© 2026.02.04

「生きる意味」は本当に必要なのか

——遺伝子から見た世界

「生きる意味って、何だと思う？」

こう聞かれると、多くの人は少し困る。

夢、やりがい、誰かの役に立つこと。

答えはいくつもあるけれど、どれもどこか“人間側の都合”的のようにも聞こえる。

では、もっと引いたところから、この世界を見てみよう。

世界は「意味」を前提にしていない

まず、大前提として確認したいことがある。

私たちは、

- 宇宙がなぜ生まれたのかを知らない
- なぜこの物理法則なのかを知らない
- この宇宙が最終的にどうなるのかも知らない

つまり、世界そのものは「意味」や「目的」を説明してくれていない。

星は理由なく生まれ、

銀河は意図なく回り、

地球も、たまたまこの場所にあった。

ここまで、宗教でも哲学でもなく、単なる事実だ。

生命は「試行錯誤の途中経過」

では、生き物はどうだろう。

進化論が教えてくれるのは、驚くほどシンプルな話だ。

1. たまたま遺伝子が生まれた
2. たまたま増えた
3. 環境に合ったものだけが残った
4. 合わなかつたものは消えた

これを、何十億年も繰り返してきただけ。

キリンの首が長いのも、
ペンギンが空を飛ばないのも、
人間が言葉を話すのも、

最初から意味があったわけではない。

首が少し長い個体が、
その時の環境では、
たまたま生き残りやすかった。
それだけの話だ。

「努力」も「才能」も、あとから意味づけされる

ここで重要なのは、

“ 生き残ったものが「正しかった」と後から言われる ”

という点だ。

試験に合格した人は「努力した」と言われ、
成功した人は「才能があった」と言われる。

でも実際には、

- 努力しても落ちる人はいる
- 才能があっても消える人はいる

進化の世界では、
結果だけが残り、理由は後づけされる。

これは残酷に見えるかもしれない。

でも、自然是そもそも優しくも残酷でもない。

ただ、そう動いているだけだ。

善悪はどこから来たのか

では、「善い生き方」「悪い生き方」はどうだろう。

進化論的に見ると、善悪もまた、生存に役立った行動の集まりだ。

- 仲間を助ける → 集団が強くなる
- 謎をつきすぎない → 信頼が続く
- 子どもを守る → 遺伝子が残る

これらは「正しいから」広まったのではない。

役に立ったから残った。

だから、時代や社会が変われば、

善悪の基準も簡単に変わる。

戦争中に「善」とされた行為が、

平和な時代には「悪」とされることもある。

「意味がない」という自由

ここまで来ると、こう思う人もいるだろう。

「じゃあ、生きる意味なんてないじゃないか」

その通りだ。

少なくとも、宇宙や自然は、意味を用意していない。

でも、ここで話は終わらない。

意味が与えられていない、ということは、

意味を押しつけられてもいい、ということだ。

- こう生きなければならない
- こうでなければ価値がない

そうした決まりは、自然界には存在しない。

あなたが何を選び、
どう失敗し、
どう残るか——

それは、あなたという遺伝子が、
この環境でどこまでやれるかを
試している途中経過にすぎない。

結論：意味は「必要条件」ではない

生きる意味がないからといって、
生きてはいけないわけではない。

雨に意味がなくても、
降るときは降る。

風に目的がなくても、
吹くときは吹く。

人間も、それと同じだ。

意味があるかどうかを気にすること自体が、
この進化の途中で生まれた、
人間らしい副産物なのかもしれない。
